

内田慶市先生側影

外国語学部教授
沈 国 威

すべてが一本の電話から始まった。1991年博士論文を提出し、神戸の某女子大に就職して間もないころ、「初めまして、内田です」という電話がかかってきた。日下恒夫先生のご紹介で急増した中国語クラスのために非常勤を頼めないかとのことだった。関大図書館には増田涉文庫をはじめ、貴重な文献資料が数多く所蔵されていることをかねてから知っていたので、もちろん二つ返事であったが、続いた言葉に驚かされた。近代の日中語彙交流に関する博士論文を書かれたそうだが、読ませてもらえないかとおっしゃったのである。出版の話が持ち上がったところで、殆ど無名の存在だったのに、いち早く情報をキャッチされていたことに感心した。その時、内田先生は、イソップのアジア伝来と翻訳を中心に研究されていた。このように、東西の文化交流と言語接触の研究が2人の共通項であったが、内田先生の研究に刺激を受け、わたしも日本の国語語彙史の語誌研究から東西の文化交流と言語接触の視点に移行できた。

1998年、縁あって関西大学に移籍した。その前に某外大からの誘いもあったが、虫の知らせか断った。またその前の年から海外へ出かけ、志を同じくする学者と一緒に切磋琢磨を始めた。復旦大学の周振鶴先生、イタリアローマ大学のマシーニ先生、ドイツゲッティンゲン大学（現エアランゲン大学）のラクナー先生、上海歴史研究所の熊月之先生、自然科学史研究所の王揚宗先生らとシンポジウムを計画し、更に視野が広がった。また初めて香港城市大学でのシンポジウムに招待された。2001年のことであった。シンポジウムの席上、内田先生は、宣教師による出版と幻の香港出版社、文裕堂について発表され、反響を呼んだ。わたしもマラッカから香港に移転した英華書院を探訪し、現地で得られた情報を手がかりに近代中国の啓蒙教育を深く掘り下げることができた。翌年、『近代啓蒙の足跡——東西文化交流と言語接触：『智環啓蒙塾課初歩』の研究』（関西大学出版部2002年）として2人の共著に結実させた。

2005年、東西学術研究所は、文科省私立大学学術研究高度化推進事業・学術フロンティア推進事業に採択され、アジア文化交流研究センター（CSAC）が設置された。以文館が、研究活動の空間として増築されることになった。定礎式の後、わたしは、一年間の在外研でハーバート燕京学社に行ったが、帰国したら言語研究班で内田先生と以文館3階の第三プロジェクト室に入った。その後、グローバルCOEプログラムに採択された関西大学文化交渉学教育研究拠点、第二期アジア文化交流研究センター、関西大学ブランディング事業と研究計画が続き、十数年間、内田先生と同じ部屋で研究に励んできた。こんなに長い間、同じ空間をシェアしたこ

とは、珍しいというほかない。そのため内田先生の人となりを至近距離で観察することができた。内田先生とはどんな人だろうか。

内田先生は、正義感に溢れる人である。不正やまやかしを絶対許さない。偽善者や巨悪にノーと言いつけてきた。毎年8月、真夏の炎天下、原爆の日にあわせて、広島と長崎に赴き、平和記念式典に参列される。2020年、コロナ禍の中、記念式典の規模が縮小され、一般参加ができなくなったが、横浜で開催された原爆記念行事に行かれた。2011年3月、学会のため内田先生と一緒にローマに行った。帰国の朝、マシーニ先生から日本で地震が起きたとの連絡が入った。帰国後、惨状が徐々に明らかになった。内田先生は積極的にボランティア活動に参加し、学生有志と一緒に何回も現地入りされた。

内田先生は、真心で人に接する人である。著名な言語研究者として国内外から内田先生を訪ねてくる若者が多く、親身になって相談に乗っておられるのが、第三プロジェクト室の日常風景になっている。学年の始まりと終わりは奨学金や就職の推薦状のシーズンである。内田先生は、ゼミ生の求めに応じて必ず手書きで推薦状を書かれる。その人数はいつも二、三十名になる。形式的に印刷されたものが多い昨今、指導教員の温かみが格段に推薦先に伝わるに違いない。

内田先生は、探索の人である。行く先々で飽くことなく文献資料を探し求める。80年代末上海での在外研修期間中、19世紀に中国で出版された洋学資料や英華辞典をたくさん買い集めてきた。故尾崎實先生の蔵書とあわせ、東西の言語接触の研究に欠かせない一大コレクションとなっている。苦心惨憺して集めてきた貴重な文献資料は、同志仲間に惜しみなく公開している。内田先生は、「私蔵は死蔵也」というモットーで、関西大学図書館長を六年勤め、文献資料の一般公開に尽力された。しかし定年を控え、故尾崎實先生の蔵書を含む、内田先生の蔵書はまだ行き先が決まっていない。気が揉まれるところである。

内田先生とは奇しくも誕生日が同じである。このような師でもあり、畏友でもある人と出会えたことは、人生最大の幸運である。

昨年からは内田先生は中国語検定協会の理事長に就任された。定年後も日本の中国語教育のために忙しい毎日が待っていることだろう。健康に留意なさりながら、いつまでも若く、活躍されることを願って止まない。